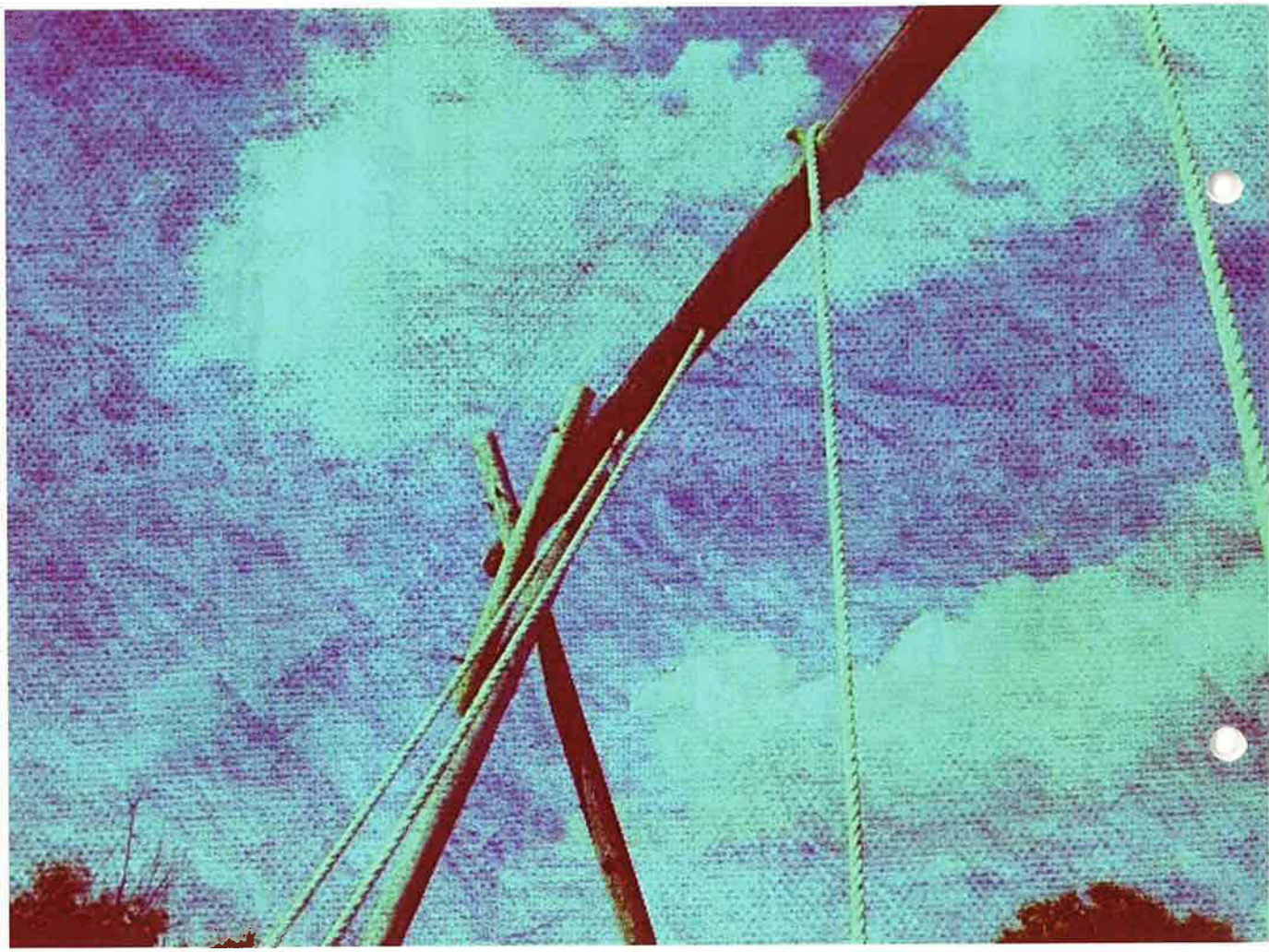
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2014年9月　NO.181



［もくじ］

2～ 3　イタリア留学を思い出して…テノール歌手 Toshi
4～ 5　地域と文化、その未来の鍵…川浪千鶴
6～ 7　高知出版学術賞その後④　あれから 14 年『ニタリクジラの自然誌』その後…加藤秀弘
8～ 9　くろそん手帖～暮らしを旅する地図づくり～…川村慎也
10～11　言葉の現場から 47　褒めの笑いのなぞ②…広井護
12　新しい時代に応える学びの空間～高知市立中央公民館～
13　高知市文化振興事業団 7 月の事業から
14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「青空」野村航平

公益財団法人高知市文化振興事業団

イタリア留学を思い出して

テノール歌手 Ｔｏｓｈｉ（森岡　俊厚）

二〇〇六年九月二十三日午前三時過ぎボローニャ空港に到着、私のイタリア留学生活が始まりました。

私は新たな人生を音楽家、プロの歌手としてやっていく修業のため、イタリアに来たのでした。

それまでは地元四国銀行に勤務する銀行員でした。ただ歌うことは大好きで、二十八歳から声楽のレッスンを正式に受け始め、休日には四国島内でオペラ上演の主役を歌う活動をするまでになり、私にとって音楽活動は仕事とともに大きなウエイトを占めるようになっていました。

私の家内はピアニストで、いつも二人で一緒に練習をして、家内の伴奏で演奏活動も共にやっていました。そして二人の夢は、私が銀行を定年退職したら一緒にイタリアに留学すること。その時が来るのをとても楽しみにしていたのでした。

でも人生というものは思い描いた通りにはいかないようです。十年前の二〇〇四年四月、家内は不治の病にかかり、一人向こうの世界に旅立ってしまいました。

何ということでしょう。私は最愛の、最も大切な宝物であった家内を失くし本当に心に穴が空いてしまい、外では笑顔を繕っても、心の中は寂しさと悲しみでいつも沈み、何をもってしても、このやるせない気持ちを楽にすることなど出来ないと苦しむ日々が続いたのでした。

そんな時、家内と二人で約束したイタリア留学のことを思い出したのです。「そうだ、イタリアで勉強して新たな人生を切り開こう！」そう考えた時、私の心の中に「新たな希望」というものが注ぎ込まれ、空いていた穴が徐々に埋まり、あんなに苦しかった心が少しずつ楽になっていったのでした。

私は銀行を退職して、イタリアで修業し、本当の声楽家になろうと決意しました。

私がボローニャで習ったのは、Giuliano Ciannella（ジュリアーノ・チャンネッラ）という先生です。オペラの主役テノールとして世界の主要歌劇場で歌った実績のある方でした。

彼とのレッスンは、私にとって想像以上に辛く厳しいものでした。彼は最初、私の歌・音楽を一切認めてくれませんでした。私が歌うたびに次のように言われたものです。「お前の歌は、まるで日本の侍が戦をしているようだ。高い音域は力ずくで出していて、とても聴くに耐えない。そんなのはイタリアの歌ではない。イタリアの音楽は恋の歌だ。声の中、歌の中に愛情があり、優しさと喜びが感じられるものでなければいけない。Ｔｏｓｈｉ（私のイタリアでの愛称、帰国後その愛称を演奏家名とする）、お前は女性を愛したことがあるのか？お前の娘を愛おしく思って抱きしめてやったことがあるのか？」等々。

私は二十年以上日本で学んだすべてをレッスンの中で出し、彼の良い答えを期待したのですが、ただ「Ｎｏ！だめ！」と答えが返ってくるのみ。

今まで学んだことの全てを否定された私は、もうどうしたらいいのかわからなくなっていました。でも逃げて帰るわけにはいきません。新たな道を進むと決めたのだし、なにより先生が真剣に教えてくれていることが、私にはよくわかっていたからです。

とにかく練習をしました。毎日、自分の喉がぶっ壊れるんじゃないかと感じる寸前まで。でも、ジュリアーノからはレッスンのたびに「Ｎｏ！」の言葉ばかりで、「Ｂｅｎｅ！いいよ！」の声はかかりません。

十数回目のレッスンだったでしょうか、彼の要求している方向はイメージとして何とはなく分かってはきたのですが、どんなに練習しても、それを実際に声として出すことが出来ない自分があまりにも情けなくて、レッスン中に先生の前で、自分を制御することが出来ずに思わず泣き出してしまいました。

ジュリアーノ先生と

大の大人がレッスン中に泣くなど、生涯で初めての経験で、自分自身で驚いたのですが、ジュリアーノもびっくりして、「Ｔｏｓｈｉどうした？」と尋ねてきました。私は拙いイタリア語で「能力のない自分が恥ずかしい。」と返事したことを覚えています。すると彼は「お前に能力がないからではない。日本で習ったことが間違ってたんだから、今出来ないのは当然だ。これから直していけばいいじゃないか。」と言ってくれました。とにかく、そんなことがあってからも「Ｂｅｎｅ」とは言ってくれないレッスンが続いたのでした。

そんな中、二〇〇七年四月に一時帰国。日本で結構寒い日が続いて、風邪を引いてしまいました。するとこれも生まれて初めての経験なのですが、一週間もしないうちに声が出なくなって、しかもその後一週間全く話も出来ない状態が続いたのです。それから序々に声は発せるようになってはきましたが、歌えるような状況ではとてもありません。

日本では一カ月間全く練習できず、イタリアに戻っても喉の調子は完全には回復してなかったのですが、レッスンは受けるようにしました。うまく歌えるはずもないと思ったのですが、「えい、もうどうにでもなれ！」と開き直ってレッスンに臨んだのです。

ところが、どうしたことでしょう。あれほど「Ｎｏ！」を連発していたジュリアーノが初めて私の歌を誉めてくれたのです。自分ではなぜなのかわかりません。でも彼は「よくなっているじゃないか。」と言ってくれたのです。今になって思うのですが、開き直っていたので、上手く歌ってやろうとか、高い音はちゃんと出せるかといった雑念がなく、無心の状態で声を出して歌ったんだと思います。

それを機にレッスンで先生の「Ｂｅｎｅ！」の回数が増えてきました。あとから聞いた話ですが、彼は他の生徒に「Ｔｏｓｈｉはイタリアに来た時とは別人のテノールになったぞ。あの年齢でも人は変われるんだから、お前たち若い者が良くならないはずはない。」と言ってくれていたそうです。

彼は出会う以前から骨髄癌に冒されていて、私が帰国する一カ月前に帰らぬ人となってしまいました。四十八回レッスンを受けたのですが、彼からテクニックは学べませんでした。でも音楽で一番大切なこと「歌に対する愛情・心をこめて歌うこと」、それは当たり前のことなのですが、実は自分は何も分かっていなかったことを、彼は教えてくれたのでした。

今でもレッスン中、私が力んで高い音域の声を出した時の、彼のしかめっ面が思い出されます。あの厳しかったレッスン、でも本当に充実した時間でした。

彼の導きで私はテノール歌手になることができました。

もりおか　としひこ

いの町出身
テノール歌手Ｔｏｓｈｉ
四国銀行を早期退職してイタリアへ音楽留学。帰国後、テノール歌手として活動。高知コンサートグループ事務局長、こうち赤い鳥の会（童謡教室）講師、女声合唱団コーロ・ベルフィオーレ指揮者。

地域と文化、その未来の鍵

川浪　千鶴

日常的によく目にする「地域」という言葉。本来の意味は、一定の範囲の場所や土地といったところだが、県や市町村など地方自治体の行政区画を意味することも多く、地方という言葉の言い換えとしても頻繁に使われている。

しかし、「地域文化」という四文字の熟語で語る時、それはにわかに自分たちの生活に必要な社会的な空間という具体性を帯び、コミュニティや住民といった「人」の存在が色濃くなる。

さて、いまや全国各地で開催されるようになった国際芸術祭のなかでも、点在する島という最も不便でローカルな場所を舞台にした瀬戸内国際芸術祭の成功がよく話題にのぼる。そこには来場者数という見える成果だけでなく、地域づくりの新しいかたちという見えない成果もあるようだ。まずは同芸術祭における小豆島での取り組みに注目してみたい。

五月に刊行された『小豆島にみる日本の未来のつくり方』（誠文堂新光社、二〇一四年）の帯には「これぞ、創造的な地域づくりの実践！」、「行政と住民、クリエイターが手を取り合い、人口減少時代に次世代モデルをつくる試み」という魅力的な言葉が踊っている。その内容は、サブタイトル『瀬戸内国際芸術祭２０１３　小豆島　醤の郷＋坂手港プロジェクト「観光から関係へ」ドキュメント』にストレートに表わされている。

いま地域に必要なのは、一過性の、消費型の「観光」ではなく、住民が主役となって未来を拓くための「関係」づくりである。芸術祭開幕の三年前から小豆島町長らとともに「構想と計画」を練り、「実践と検証」に携わってきた、現代美術家でプロジェクト・ディレクター、そして本書の編者である椿昇氏は、そう明言する。

昨年三月から十一月にかけて、十六年ぶりに復活した神戸と小豆島をつなぐ定期フェリーに乗って、絵画、彫刻、写真、建築、デザイン、教育、演劇、ダンスなどアートに関係する多くの「人」が関西近郊から小豆島に通い、滞在し、島の「人」たちとの試行錯誤の共同／協働の中から、思いがけない「もの」と「こと」を生みだしていった。

たった一度の観光で島を訪ねて終わりではなく、繰り返し訪れることで、人と人、人と自然、人と歴史の関係は見直され、結び直されていったといえる。

本書の中で、ゲストという距離を置いた存在から、「ただいま」と自然に口にするまでに地域になじんでいった作家たちは、「東京では、どうしても『つくること』それ自体が『仕事』の時間になるわけですが、小豆島では『生活』のなかに『仕事』が含まれている感覚が強かった」と自身の体験を語っている。島の人たちと作家が対峙していた時期から、長期の島暮らし、共同生活を通じて「一緒に（島を訪れる）誰かを迎える」という同じ立ち位置になっていった過程も重要だ。こうした人々のゆるやかな変化が、地域の内か外かという垣根を超えて、内でもあり外でもありうるという豊かな関係を生み出すことにつながっていった。

言い方を換えれば、地域文化に不可欠なのは「当事者意識」といえるかもしれない。作品ありき、作家まかせではなく、まず地域に暮らす人たちの「想い」を集め、その「想い」をかたちにすることを大事にしたいという椿氏の言葉には、大いにうなづかされる。

今年一月中旬から二月下旬にかけて、須崎市のまちかどギャラリーで開催された「現代地方譚　アーティスト・イン・レジデンス須崎」は、そうした人の「想い」ありきの地元アート・プロジェクトの好例だった。

アートを通じて須崎というまちの魅力を引き出し、地域や高知のアート・シーンを面白くしたいという企画・運営スタッフのフツフツとした想い、呼びかけに応えて須崎に集合した作家たちの、初めてのまちで初めての滞在制作に取り組むドキドキした想い、そして、地域の人たちの須崎のことをもっと知りたい、知ってもらいたい、いま・ここで生まれたばかりのワクワク感をもっと多くの人と共有したいという想い。こうした個々の想いが集まり、プロジェクトという公共性を帯びることで、地域文化の「質」が一挙に深まる様を目の当たりにすることができた。

まちかどギャラリーの前に集う「アーティスト・イン・レジデンス須崎」参加作家たち
撮影：Masa Takahashi

小豆島のプロジェクトは、地域を「考える人」づくりのために、子どもたちの育成を軸にした長期のヴィジョンのもと、芸術祭後も継続していく予定だという。そのために、行政としっかりタッグを組んだ椿昇氏は、今後も「たくさんの良き耳と良き目が持続的にかかわってくれる仕組み」を工夫していくだろう。

「現代地方譚　アーティスト・イン・レジデンス須崎」は、春に続き、秋に第二弾の開催を予定している。滞在制作場所や発表場所もまち全体に広がり、前回以上に多くの作家と地域の人が当事者として関わるとのこと。春に参加した作家が須崎再訪を希望し、秋の部の協力を申し出た例もあると聞いて、うれしくなった。地域文化の進展には、地域とさまざまな縁を結んだ「良き耳と良き目」をもつ外の人たちとの連携が欠かせないのだから。

小豆島や須崎で試みられていることは、記録以上に人々の「記憶」に残り続けてほしい。展覧会やアート・プロジェクトの単なる手法としてではなく、ゆるやかな「ネットワーク」を育むしたたかな仕組みとして長く機能してほしい。

現在も、そして未来においても、地域と文化をめぐる可能性の鍵は、「人」が握っている。

かわなみ　ちづる

一九五七年　山口県下関市生まれ

高知県立美術館企画監兼学芸課長。一九八一年から福岡県立美術館に勤務、同館学芸課長を経て、二〇一一年から現職。日本の戦後から現代の美術を専門にし、現代美術展を多数企画。地域社会における美術館の役割に関心をもち、美術館教育やアートマネジメントにも力をいれている。

高知出版学術賞その後④

あれから十四年『ニタリクジラの自然誌』その後

加藤　秀弘

前世紀と言うと大げさに聞こえるが、西暦で言えば終末の節目にあたる二〇〇〇年（平成十二年）に第十一回高知出版学術賞をいただいてから、既に十四年が経過した。中高年にとっての十四年は瞬く間に過ぎるが、幼少期では小学校入学から成人式までの時間的且つ量的重さが感じられるのが普通である。この普通さは、やはり節目の多さに起因すべきと言うべきであろう。

筆者にとってのこの十四年間は、結構いろいろなことがあり、節目もそれなりに多くとても瞬く間では無かったような気がする。一番の変化は、転職であった。平成十六年八月、私は旧鯨類研究所から転じた水産庁遠洋水産研究所を再度転出した。転職される方々にはそれぞれの契機があり、私の場合もそうだったろうと思うが、実はどうもはっきりとしない。他にも理由はあったのであろうが、強いて挙げれば人事の膠着とでも言うべきなのであろうか？ 専門性の高い分野では、組織内では上に行けないなら、横に動かざるを得ず、横に動けないなら外に出る他には膠着を解決する道はない。比較的若い年齢で、遠洋水産研究所の研究室長に就任してから瞬く間に十七年が過ぎた頃、私の周囲では人事も著しく膠着し、自分の組織外転出によってしか澱みを解決できそうにもないと考えるようになった。

しかし、そうして自分自身の去り時を感じるようになると、（幸運なことに）幾つかの可能性が生まれて来た。そうした可能性は、決してランダムに生じるのではなく、むしろパッチ状に生じる〝良くも悪くもある時にある事がまとまって起こる〟というあれである。そうした可能性の中の一つとして大学転出を具体的に考えるようになり、公募を経て平成十六年八月に東京海洋大学海洋科学部（旧東京水産大学）に奉職することになった。

この間にはいろいろなことがあったが、それは本稿とはあまり関係が無いのでおくとする。が、この転出に伴って発足以来兼任してきた高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科連携教授を離れることになった。高知大学の大学院は、現在は総合人間自然科学研究科に統合されているが（農学系の一部は愛媛大学との連合大学院を構成している）、当時は各学部の延長線上に大学院が構成されていた。そうしたなかで、黒潮圏海洋科学研究科は学際的で、理学部、農学部だけでなく医学部、更に人文学部系、教育学部系の先生方も加わった非常にユニークな研究科であった。経緯を知らない私には、発足からわずか四年で統合となったことが惜しまれてならないが、研究科長の深見公男先生ほか、盟友の山岡耕作先生、寮歌仲間の諸岡慶昇先生、奥田一雄先生との深く濃い交流も懐かしまれる。

諸先生の明察とご厚情によって、黒潮圏海洋学研究科の一角に当時私の所属していた独立行政法人水産総合研究センターとの連携によって鯨類生態系講座という名称のセクションが生まれた。しかし、筆者自身の非力さもあり実際的にはほとんど貢献できぬ間にそのポジションを離れ、近年水産総合研究センター国際水産資源研究所（かつての遠洋水産研究所）鯨類グループ長の木白俊哉（きしろとしや）博士に参画していただくまで、大きな空白を作ってしまったことにはお詫びの申し上げようもない。

当時兼任を受けた理由は、もちろん〝人材づくり〟が目的であった。研究者育成ももちろんあったが、〝クジラの存在を心得た〟技術者、政策担当者を要請したいと考えたからであった。しかし、他大学の専任教員となって改めて思うが、連携は連携にすぎずやはりそのままで〝人材づくり〟に挑めるほど現実は甘いものではなかった。『ニタリクジラの自然誌』で書かせていただいた通り、高知県にとっての鯨類は、水産的資源であり、観光的資源であり、環境的資源でありそして文化的資源である。こうした事情を心得た人材が高知県の行政、教育、研究関連組織に存在して手腕を発揮してほしいというのが、筆者の偽らざるそして身勝手な切望であった。

その意味では、ニタリクジラの観鯨（ホエールウオッチング）事業推進を立ち上げた高知県当局、県水産試験場の取り組みは特筆されるべきもので、とりわけ篠原英一郎技師（後に当時の海洋局水産振興課長）の熱意ある仕事ぶりは忘れられない。こうした背景もあり、土佐湾には一時全域的な土佐湾ホエールウオッチング推進協議会も結成された。

しかし、県の推進プロジェクトの終了、阪神・淡路大震災以降の全国的観光の冷え込みも影響してか、観客動員数も下降気味となり、土佐湾の全域的取り組みもいつの間にか失われたようだ。とりわけ、世界的に稀有なニタリクジラのホエールウオッチング揺籃の地である県西部での事業冷え込みには寂しさが伴う。さまざま事情があったに違いないし、回復の努力もあったのかもしれない…。いずれにしても既に土佐湾から去った筆者は何もできなかった。遠方より今後の回復を衷心から望む他はない。

ニタリクジラの研究面ではどうか？ 遠洋水産研究所において筆者の実質的後任となった、木白俊哉さんはその後もニタリクジラの研究、特に個体識別だけでなく衛星標識も併用した回遊研究に取り組み、その成果をまとめられ博士学位を取得した。相当の進捗もあったが、やはり土佐湾ニタリクジラの由来や実態が解明されたわけではない。一つの課題解明は新たな課題を呼ぶと言ったところであろう。

しのぎを削るニタリクジラの雄集団？

残された研究命題としては、第一に土佐湾ニタリクジラが黒潮の東側に生息するニタリクジラと系統的にどのような位置関係にあるかと言うことである。別種としての位置付けを提唱する研究者もいるが、未だに決着はついていない。また、個人的に決着をつけたいのは、六、七年ほど前のＮＨＫ自然番組でニタリクジラを扱った時に観たシーン、冬季の土佐湾で雄とおぼしきニタリクジラの集団が互いにしのぎを削りながら、これまた雌らしき個体を追尾する姿である。非常にユニークで、今のところこのようなシーンはザトウクジラ以外の鯨類では報告されていないが、解明できれば、土佐湾の鯨にまた新たな魅力が加わる事だろう。

かとう　ひでひろ
東京海洋大学大学院教授

くろそん手帖
～暮らしを旅する地図づくり～

川村　慎也

黒尊川は四万十川流域でもっとも美しいと言われる支流である。延長三十一キロメートルの流域には四季折々の美しい風景と土地に沿った暮らしがある。流域の暮らしの景観は文化庁から国の重要文化的景観にも選定されている。

この黒尊川流域を収めた地図が「くろそん手帖」である。黒い表紙をあけると長さ約二メートルの白地図が蛇腹に開く。

くろそん手帖がなぜ白地図なのかも含め、本稿ではくろそん手帖の製作にあたって考えたこと、完成後の活用について、教育委員会担当者の目線で紹介したい。

くろそん手帖は黒尊地域の住民団体「しまんと黒尊むら」と四万十市教育委員会が協働した地域の地図づくりの成果品である。製作には黒尊むらをはじめとする地域の人たちやコーディネーター、デザイナー、市内の若者が関わった。

製作のきっかけは、黒尊を訪れる人たちに地域の地図を用意したいという地元の意向からだった。その前年に地域の小学校で作った地図が好評だったことも良いきっかけになっていたと思う。

せっかく地図作りをするなら少し丁寧に作ってみようということで、情報収集やその後の使い方までゆっくり考える時間をとり、およそ十一カ月をかけてくろそん手帖は完成した。

当初から考えていたのは、製作する地図が「捨てられないこと」だった。観光地を訪れた際に入手した現地の地図は、旅の間は有用だがいずれ年月が経つと役割を終えて捨てられてしまう。しかし、「黒尊」と名のつくものがゴミ箱に行ってしまうのは寂しい。

そこで考えたのが「捨てられない」方法だ。あれこれ議論した挙句に辿り着いたのが、「自分が書いたものはそうそう捨てないだろう」という予想だった。提供される情報は時間の経過とともに価値を失いがちだが、そこに想い出や自分の旅の記録があるものは簡単にゴミ箱に行かないだろうと考えたのである。

地図の情報収集が進み、四季を通じた見どころや伝説の場所等が多く集まってきた頃、「いつでも見れるわけではないけんね。」と四季の情報が一枚の地図に盛り込まれることを少し申し訳なく感じるという意見が黒尊むらのメンバーから飛び出した。黒尊の四季には息を呑むような美しい瞬間があるが、それは時と場所を選ぶ。それはすなわち地域の楽しみ方にも旬があるということだ。それなら提供する情報を黒尊の旬に合わせようと地図と情報を分けて考えてみることにした。

自分の想い出を書くための余白、地域の旬に合わせた情報提供の二つから行き着いたのが「白地図」という選択だったわけである。

今では白地図であるくろそん手帖を補完する資料が少しずつ増えてきている。また、資料を増やすだけでなく、目的に応じて選んで使ってもらえるような仕組みづくりも進めている。

黒尊の道は同じようなカーブが何度も連続しており、初めて訪れる人には場所の特定が難しい。地域の人なら「○○ちゃん宅の前」などと表現してしまうのだけれど、地域外の人だとそうはいかない。そこで目を

くろそん手帖　全長２ｍの蛇腹の白地図に利用者が自分の旅を書き込んでいく

つけたのが電信柱。電信柱の番号は上流にむかって大きくなり、比較的等間隔で立てられている。電信柱の番号を地図に記載することで、似たようなカーブの中にいても自分の位置が分かるしかけだ。当初は案内標識を新設することも検討したが、地域にあるものを使うことで落ち着いた。実際学校行事で利用してくれる小学生達に説明すると五分ほどで理解し、見つけたものや出来事を正確に地図に記載してくれる。

こうして出来上がったくろそん手帖は、希望者に配布する以外に、手帖の使い方を知ってもらうためのツアーを年間五回実施している。ツアーの内容は季節の草花の観察や、川でテナガエビに出会う小旅、稲刈りや紙漉きといった地域の生業に係るイベント等である。内容は、黒尊の季節の出来事を楽しむことを大切にして、背伸びせずにできることを企画している。地元の食材を使った農家レストラン「しゃえんじり」のお弁当も好評で、ツアーの楽しみの一つになっている。

手帖とセットで使う資料。Ａ４サイズ。３つ折りにするとくろそん手帖に挟むことができる

ツアーには幼児から八十代まで様々な世代が参加してくれていて、毎回参加者は二十名程。初参加者とリピーターが半々くらいの割合だ。イベントとなると多くの人を集めることを重視したくなるが、企画するおんちゃん達は「名前が覚えられるくらいの人数で」と言う。くろそん手帖が来訪者と地域の人たちの関係を紡ぐ道具だと考えるなら、適当な数と言えるだろう。ツアーではかならず手帖を書くために時間が割かれ、各人が好きな筆記用具で思い思いに手帖を彩っていく。

使われた手帖を年に一度持ち主に出品を呼びかけて集め、手帖の展覧会を開催している。展覧会にはほんとうに様々なくろそん手帖が帰ってくる。表紙飾りにこだわったもの、ゴム止めの付け方を工夫したもの、ポケットをつけたもの、出来事を絵日記のように描いたもの、裏の余白を使ったもの、出会った生き物を記載したもの、それぞれの旅や興味がどれほど多様であったかがよく分かる。

くろそん手帖展覧会の様子。優秀作品には黒尊の三椏で漉いた和紙の賞状が贈られる

この展覧会では、来場者が多彩な手帖を見ることで興味を持ってもらったり、使い方の参考にしてもらったりすることも狙いの一つだが、訪れた人がどのように黒尊を楽しんだかを地域の人たちや運営に携わる者が知ることができることも大きな収穫になっている。

手帖を見に来たおんちゃんと世間話に花が咲き、また新しいツアーの種が芽吹くことも珍しくない。

くろそん手帖の取り組みは、地域活性化などと大仰なことを目論むつもりはない。ただ、黒尊に関わるようになって、良い景観というのはその美しさだけでなく、どれほど多くの言葉で語られ、その風景を自分たちのものだと感じられる人がいるかということが大切な指標なのではないかという思いを強くしている。

くろそん手帖が、地域に暮らす人たちがちょっとだけ自慢気に地元のことを語り、訪れる人とのコミュニケーションのきっかけとなるそんなツールに育ってほしいと願いつつ、また黒尊へ出かけていこうと思う。

〃くろそん手帖についてのお問い合わせは、四万十市教育委員会生涯学習課（０８８０－３４－７３１１）まで。〃

かわむら　しんや
一九七二年　大阪市生まれ
奈良大学大学院修士課程修了。
四万十市教育委員会生涯学習課職員。遺跡の調査や文化的景観の保全など文化財に係る仕事を担当する。

言葉の現場から 47

褒姒の笑いのなぞ②

広井　護

「褒姒の笑い」（井上靖）の授業紹介を続ける。古代中国を舞台とする笑わない美女、褒姒の物語である。国が滅びたときに褒姒は笑う。なぜ褒姒は笑ったのだろう。これが授業のテーマである。

褒姒の生い立ちでは、次のことが強調されている。

（A）褒姒は幼い時から自分が拾い子であり、両親の情けでいま生きていられるのだということを言いきかされて生い育って来た。他国の道端に捨てられて夜泣きしていたのを、憐れに思った両親に拾われ、一緒にこの褒の国に連れてこられたということであった。両親は拾い子だ、拾い子だと言い含めることによって、娘に恩を着せているわけであった…（「褒姒の笑い」・新潮文庫「楼蘭」所収）

生徒達の認識をゆさぶるために、あえて意地悪な発問をしてみる。

T「『褒姒は…自分が拾い子であり、両親の情けで…』とあるけれど、本当に拾い子だったのかな？」

P「…実の子だったかもしれない。『娘に恩を着せている』ってあるから、恩を着せるために両親は嘘を言ったのかもしれない」

T「何のために恩を着せるの？」

P「褒姒が将来いい家にお嫁に行ったとき、恩返しをさせるため」

P「でも、本当に拾い子だったから恩を着せたとも考えられるんじゃないかな…」

P「どっちにしても、褒姒は幼いときから美人だったと思う、将来いい家にお嫁に行ける、みたいな。で、両親は欲が出た。『拾い子だ、拾い子だ』と言い含めたのは、投資だったと思う。ハイリターンを期待したと思う」

生徒たちからは様々な意見が出る。T「褒姒は両親が言うように拾い子だったかもしれないし、実は本当の子だったかもしれない。

そこはわからないんだけど、この書き方には、実の子をだましてまで恩を売っているんじゃないか…と思わせるふしがあるね」

語り手は、褒姒が拾い子だったのか、実の子であったかということを明言しない。これは、褒姒の正体に含みをもたせ、神秘化するための仕掛けだと思われる。

エピローグで紹介される（「史記」中の）「説話」によれば、褒姒は「イモリに変身した神竜」が後宮に仕える名もなき娘に生ませた子とされており、不気味に思った娘（実の母親）によって道端に捨てられる。その子を拾って育てたのが、貧しい弓づくりの夫婦なのである。だとすると褒姒は人間ではないことになる。天命の変更を告げ知らせるべく、天が下した超自然的存在…ということになる。

しかし、語り手がこの「説話」を百パーセント真とみなしているのなら、はじめから「説話」を語るはずだ。語り手は、この話を物語の「後書き」としてごく短く付け足しているにすぎない。

語り手は褒姒を――超自然的存在かもしれないと含みを持たせつつ――生身の人間としてもリアルに描いている。褒姒は「生身の人間」であって、同時に「超自然的存在」なのだ。そういう二重の存在として描かれている。そう考えるとこの物語は理解できるのである。

T「褒姒が拾い子だったかどうかはわからない。でも、反復され、強調されていることは、『言いきかされて』『言い含める』とあるように、褒姒が『両親の情けで今生きていられるのだ』と言われ続けていたということだ。特に『言い含める』という言葉には『刷り込む』『洗脳する』に近い強烈なニュアンスがある。

自分が拾われて来た子で、両親の情けによって今生きていられるにすぎないと『言い含め』られることは、子どもにとってはショッキングなことだよね…」

ところが、（A）の記述は（B）のように続く。

（B）…娘に恩を着せているわけであったが、褒姒の方はそんなことでいっこうに心を動かされなかった。拾い子であろうとなかろうと褒姒にとっては他に父も母もなかった。（同書）

二通りの読みが可能である。

褒姒にとって、自分が拾い子であるかどうかということは「そんなこと」でしかなかった。つまり、ささいなことだった。褒姒の心は強靱だった。非人間的なほど。…褒姒が「人間ではない」ことの暗示かもしれない。

もう一つの読みは、こうだ。

褒姒の心は、強靱だったのではなくて、文字通り動かなかった。心が――感情が麻痺していたのである。だからショッキングな言葉も褒姒の心を素通りした、という読みである。

「拾い子であろうとなかろうと褒姒にとっては他に父も母もなかった」という表現は、次のようにも読めるのではないか。

褒姒にとって両親は――つまり家庭は全世界を意味する。この家庭の中で褒姒は、幼いときから自己の存在を否定され続けていた。自分は拾い子であり、両親の情けで今生きていられるにすぎないと…。褒姒の心に刷り込まれたのは、「他国の道端に捨てられ夜泣きをしている」憐れな赤子としての自分の姿だった。つまり世界から拒否されている存在としての自分である。これは幼い子どもにとっては耐え難い自己認識だろう。この衝撃を回避するために、褒姒の感情は麻痺してしまった。…と読めないだろうか。

「笑わない美女」として生きることになる後年の褒姒の描写をたどってゆくと、褒姒は単に笑わなかっただけではなく、感情表現そのものをしなかったことがわかる。

（C）褒姒は後宮にはいった時も、王子伯服を生んだ時も、嬉しいのか、悲しいのか、その表情を動かすことはなかった。（同書）

（D）褒姒は自分が正妃となり、自分が生んだ伯服が皇太子になっても、やはり、感情というものは顔に表さなかった。（同書）

褒姒の顔は、能面のように無表情だったのである。

感情を顔に表さなかったのは、感情がなかったから――感情が麻痺していたからではないだろうか。国が滅んだときに褒姒が笑ったのは、そのとき感情が蘇ったからではないだろうか。そう考えると物語のつじつまが合うのである。

もちろん、褒姒が人間ではなかったから感情を表さなかったという読みも可能である。

物語は次の言葉で終わっている。

（E）…この説話は褒姒が幽王の寵妃でも愛妃でもなく、いうならば、幽王の運命そのものであるということを物語っているように思われる。運命であるとすると、褒姒が笑わなかったことは異とするに当たらないようである。それが内部深く匿しもっている生命のようなものが動き出した時だけ、運命は妖しい会心の笑みを浮かべたのである。褒姒は笑ったのである。（同書）

褒姒が幽王の運命の化身であるなら「褒姒が笑わなかったことは異とするに当たらない（運命そのものであるなら人間ではないのだから）」と語られている。しかし語り手は、無条件には説話を受け入れていない。「この説話は…物語っているように思われる」「褒姒が笑わなかったことは異とするに当たらないようである」と、慎重に断定を避けている。

なぜなら褒姒は二重の存在だからである。褒姒は、「生身の人間」であって、同時に人間ではない「超自然的存在」として描かれているのだ。

もし褒姒が人間ではなく、したがって人間性を持たず、超自然的な妖怪めいた存在としてのみ描かれていたならこの物語の面白さは半減する。他方褒姒が、超自然的要素を全く持たず、感情を喪失した不幸な女としてのみ描かれていたら、この物語は迫力を失うだろう。

存在の二重性が褒姒の人物像に、独特の奥行きと強烈な存在感を与えている。悲しく、せつなく、不気味で、恐ろしい美女、褒姒なのである。

次は、褒姒が笑った瞬間である。

（F）この時、幽王は褒姒の笑い声を耳にした。玉でも転がすような琅々とした少し甲高い笑い声であった。…褒姒は顔を少し斜めに仰向けて夜空を見入っており、口辺の筋肉がゆるんだと思うと、また笑い声がその口から漏れた。（同書）

哀しみを含んだ描写であり、褒姒の姿は人間的である。――すると、褒姒はなぜ笑ったのか。この問いが残るのである。

ひろい　まもる
一九五四年　高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

新しい時代に応える学びの空間
～高知市立中央公民館～

平成十四年に文化の拠点として建設された複合施設「高知市文化プラザかるぽーと」。

ホールや市民ギャラリーのイメージが強く、開館から十二年が経過した今も、九階から十一階が中央公民館であることは、意外と知られていないようです。

中央公民館では、公民館事業として市民学校や市民の大学などの各種講座を実施しているほか、自発的な生涯学習活動の場を提供するため、貸館事業を行っています。中央公民館についてもっと知っていただけるよう、フロアごとに施設をご紹介します。

九階には会議等に便利な大小四つの学習室と、多目的な用途に利用できる和室、路地のある茶庭や水屋を備えた本格的な茶室があります。落ち着いた趣のある和室や茶室に、初めて来館した方から、「かるぽーとの中に、こんな場所があるの!?」という驚きの声もお聞きします。

十階は、創造活動ができる場として、工芸室、彫塑・陶芸室、絵画室、調理室が配置されています。

備品類については、陶芸用の窯や電動ろくろのほか、版画や彫刻に使用する各種工具、調理器具など、種類も数も充実しています。しかも、陶芸窯を除く備品は、すべて無料でお使いいただけます。

最上階となる十一階には、音響設備を備えた三室があります。大画面のスクリーンやプロジェクター等が使用できる大講義室。グランドピアノがある教室スタイルの音楽室。また、壁一面に鏡が配されたダンススタジオのような軽運動室には、更衣室やシャワールームも完備しています。

各部屋の窓から、眼下に広がる高知市街の眺めが素晴らしいのですが、夕暮れどきや夜景も素敵でおすすめです。毎年八月に開催される高知市納涼花火大会の夜は、建物西側の部屋をご利用いただくと、夜空に綺麗な打ち上げ花火が見えます（ただ、風によっては煙が邪魔をすることも…）。ただし、中央公民館は社会教育施設であり、宴会にはご利用いただけませんので、ご注意を。

社会教育施設という言葉を使いましたが、中央公民館は社会教育法に基づき設置されており、営利目的の販売等を行う場合は利用できないなど、使用目的により使用許可の制限があります。

一方、中心市街地に位置することや、ホールやギャラリーとの併用利用ができることから、学会やコンベンション、企業の研修会場としての利用など、他の地域の公民館とは異なった役割も果たしています。企業の社内会議や採用試験などにも、ぜひご利用ください。

実は、中央公民館の稼働率は、平成十六年度をピークに年々減少しています。そこで、もっと多くの方にご利用いただけるよう、平成二十六年八月一日から、次のとおり運用を見直しました。

まず、定期的に中央公民館を利用し、一定の要件を満たす生涯学習サークルは、使用料が五割減額できるようになりました。新規利用サークルも対象になります。

次に、催し等の準備期間を長く取れるよう、受付開始日を二カ月前から六カ月前に変更しました。

また、生涯学習に対するニーズが多様化、高度化してきたことから、従来の公民館事業では対応しきれないニーズに応えることができるよう、民間営利社会教育事業者も、公民館の使用ができるようになりました。

これらの運用については条件がありますので、詳細はお問い合わせください。

今後も大勢の方にご利用いただける中央公民館となるよう努めていきますので、よろしくお願いいたします。

■お問い合わせ先
高知市立中央公民館（月曜休館。祝日の場合は開館）
高知市九反田2－1
電話088－883－5061

高知市文化振興事業団　7月の事業から

キッズフリーマーケット2014

売るのも買うのも子どもだけのフリーマーケット、「キッズフリーマーケット2014」を七月六日(日)に開催しました。

遊びを通してお金やモノの価値を学ぶことを目的とした本事業は、毎年たくさんの子どもたちの応募・参加があり、四回目の開催となった今年も、会場の高知市文化プラザかるぽーと七階市民ギャラリー第一・第二展示室は興奮と熱気に沸き返りました。

今回は初の試みとして、株式会社高知銀行のスタッフによる相談ブースを設け、子どもたちに商品のレイアウトや声のかけ方といったアドバイスを行いました。その結果、創意工夫をするおもしろさを感想文に書く子どもが多く、新たな学びを感じ取った様子でした。

ただ、ある感想文には「はじめは全然売れなかったけど、周りの人が売り方のコツを教えてくれて売れはじめた。もしあの時教えてくれる人がいなかったら売れなかったと思う。教えてくれて、嬉しかった」とあり、私たちが一から十まで用意しなくとも、子どもたちは子どもたち同士でしっかりと学ぶことができるのだと感じました。

〈参加者数・七百名〉

東京デスロック作品「CEREMONY」

二〇一四年七月十八日(金)、高知市文化プラザかるぽーと小ホールにて、東京デスロック作品「CEREMONY」の公演が行われました。

東京デスロックは主宰・多田淳之介氏を中心に二〇〇一年から活動を開始。二〇〇八年から三年間、埼玉県富士見市民会館キラリ☆ふじみのレジデンスカンパニーを務めるなど、地域に根ざす劇場やカンパニーとともに地域の芸術活動を推し進めています。

今回の作品のテーマは「儀式」。劇中に登場する様々な「儀式」を通して、人と人との関係性が希薄になりつつある現代の私たちに、物事を他人と共有することの大切さを問いかけます。会場に舞台は設けられておらず、役者たちは客席を回遊。そのため役者の息遣いや顔に流れる汗、遠くからでは分からない小さな動きを間近に感じることができます。挨拶を交わしたり全員で輪になって踊るといった観客参加の演出、音楽や映像、役者たちが体を極限まで追い込む舞踊など、今までに体験したことのない刺激的な内容に観客全員が思わず見入っていました。

今回の公演で高知の演劇ファンに鮮烈な印象を残した東京デスロック。終演後には早くも次回を望む声がたくさん聞こえました。

〈入場者数・八十一名〉

高知を撮る

第30回写真コンテスト入賞作品

縁起師

（平成22年８月　安田町）

河野　彰子

お姫様になれる場所

風俗歳時記

幼い頃、お姫さまになることを夢見た人は私だけではないだろう。お姫さま～？戯けたことを…と笑っているそこのあなた！「お姫さまになれる場所」があるのをご存じ？

今から四十年ほど前、子どもたちは児童向け月刊誌の発刊を毎月心待ちにしていた。女の子の間で人気だったのは、バレエ漫画。その漫画人気を追うように、テレビでバレエを題材にしたドラマ『赤い靴』が大流行した。高知でもこの頃、バレエ人口が一気に増えた。私も漫画が流行し始めた頃、親に手を引かれてバレエ研究所に通い始めた。驚いたのは、バレエの世界には、王子様がいて、その相手に必ずお姫様がいること。クラシックの名曲と超越した身体能力で表現をする美しいバレリーナにすっかり魅了された。

高知に「バレエ」がもたらされたのは、六十年余り前。高知市のバレエ研究所の創始者がゼロから築き上げ、今では、国内外で活躍する優秀なダンサーを多く輩出している。開所まもない頃は、練習着であるレオタードもなかなか手に入らず、シュミーズ（女性用下着）でバーレッスンしたり、練習場所が十分でなかったため、消防署の二階で本番前のリハーサルや衣装合わせをしたりと、それはそれは手作りの舞台だった。高知にバレエ文化を根付かせた先生は、今年、傘寿を迎えた。毎年開催している発表会では、夢の世界へ誘ってくれる華やかな演出で、高い技と究極の美が表現される。お城で開かれる舞踏会や白鳥達が群舞する湖…自分自身が舞台に立たなくても、お姫さま気分を味わえる。

私は随分長く、高知県の文化振興のための様々な役職に就いているが、高知で最も全国に誇れるレベルの芸術には、一つに「バレエ」が挙げられると思っている。小さなバレリーナたちと指導者、家族、支えるファンが一緒になって作る舞台こそ、お姫様になれる場所である。

（立花香）

素展 そてん

RESOURCES

あつまる　うみだす　ハッとする
何かに気づく　リソース博覧会
（かもしれない）

1 かるぽーと会場＆周辺　入場無料

［会期］2014.9/5（金）▶9/14（日）10:00-18:00

［会場］高知市文化プラザかるぽーと 7F 市民ギャラリー（第1・2・3展示室）
〒780-8529 高知県高知市九反田2-1／お問合せ先 088-883-5071

etc… 会期中 素展と高知市内のお店がコラボして「ことば集めラリー」を開催
ワークショップ、ライブペイントなど関連イベントも開催予定！

2 藁工ミュージアム会場　入場料300円 高校生以下無料

［企画展］ 素展 meets「現代地方譚」
HOW TO ブリコラージュ ―素（モノ）と対話すること 素（もの）に語らせること―

［会期］2014.9/13（土）▶14（日），9/20（土）▶11/3（月）10:00-18:00　＊入館17:30まで ＊9/24、火曜休館 9/23は祝日のため開館

［会場］アートゾーン藁工倉庫 藁工ミュージアム
〒780-0074 高知県高知市南金田28／お問合せ先 088-879-6800

1966カルテット「THE BEATLES CLASSICS」

ビートルズの日本初代担当ディレクター高嶋弘之が送り出す、1966 カルテット。
極上のクラシックアレンジによる、ビートルズの名曲をお楽しみください。

■日時
2014年9月12日（金）18:00開場 18:30開演

■会場
高知市文化プラザかるぽーと大ホール

■料金
一　　般　前売り 3,000円　当日 3,500円
高校生以下　前売り 2,000円　当日 2,500円

■お問い合わせ
高知市文化振興事業団　088-883-5071

特別企画「高嶋弘之のビートルズプレトーク」

開場時間中の 18:15 より大ホールステージにおいて、1966 カルテットのプロデューサーであり、ビートルズの日本での仕掛人でもある高嶋弘之氏による、プレトークを開催。ビートルズ初期作品の邦題の秘密やヒットの仕掛けについて、貴重なエピソードを語ります。
また、会場ロビーには世界に 1 枚だけのザベストオブザビートルズの LP や、直筆サイン入り写真など、お宝グッズの展示も行います。

今号の表紙

「青空」

野村航平

夏の終わりをイメージしたく、ブランコを撮りましたが、ブランコ全体を写すのではなく空を強調し、加工してみました。

ブランコは木で作られていて、高知の田舎の雰囲気が感じられました。

（のむら　こうへい／
国際デザイン・ビューティカレッジ２年生）

風俗

スケジュール帳

あるネットサイトを眺めていて、いわゆる大富豪といわれるビジネスオーナーたちのスケジュール帳が意外にも真っ白だった、という話が目にとまった。仕組みを思いつき会社をつくったら、あとは従業員に任せて、自分は次のビジネスを模索する。だから定例会議などの予定はせいぜい週に三、四件程度だという。

オーナーが暇そうに見える会社ほど儲かっているという説があるが、言い換えれば、オーナーが忙しそうにしている会社ほど儲かっていないということにもなる。そういう意味でもスケジュール帳の中身は興味深い。

ともかく、およそ大富豪やビジネスオーナーの世界になんの関わりもないが、私などのスケジュール手帳にも、忘れちゃいけないことだけを書くだけで、予定がほとんど書かれていない。スケジュール帳だけみれば、まさに大富豪のようなのだ。

大富豪がなぜ予定を極力入れないのか、という理由はきわめて明快で、「予定を入れ、それに拘束されたくない」からだというのだ。確かに、功成り名を遂げてまで、「予定」に拘束されるのは馬鹿げている。お金持ちになろうとするのは、世のしがらみから自由でありたいためだろうし、そうなれるのだから。

たとえスケジュール帳の空白が大富豪のそれに酷似しているからといって、私などはスケジュール帳に載せようもないような細々とした雑用に、日々忙殺されている。傍から見ればあたかも忙しそうに！それでも寸暇を惜しんで、仕事をしない時間をつくり、仕事を忘れ、仕事空間から離れようと、日々もがいている。

（森）

文化高知 No.181 [隔月発行]
2014年(平成26年) 9月1日発行

公益財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869